

《論  
說》

《歴史舞台の上のトマス》

——中世の夏——十三世紀——

柴 田 平 三 郎

中世の哲学の歴史を叙述するにあたって、聖トマスの仕事と意義は、のちのトミズムの勝利という点から見られてはならないのであって、十三世紀の歴史的な広がり<sup>(1)</sup>のなかで見られるべきであろう。

E・ジルソン／P・ペーナー

序

トマス・アクィナスは、どんな時代に生きていたのか。

こういう問いは、ある意味ではすでに語り尽くされている。「封建制度の最盛期」、「中世教皇制の絶頂期」、「十字

軍の時代」、「都市と大学の時代」、「スコラ学の偉大な世紀」、「ゴシック大聖堂の時代」、こんな呼称がすぐに思いつく。

無論のこと、それらに少しの間違いもないだろう。だが、かすかに危惧されるのは、そこに相対的な繁栄と安定の気分が窺われすぎることだ。トマスはこういう平和で安穏な時代に生き、思索をした、だから彼の書いたものも、壮大ではあるが、退屈を免れない、そんな予断が横行してはいまいか。

思想家はいかなるときも、真空のなかで思索をするのではない。中世カトリック教会の最大のエージェントのように言われるトマスもまた然りである。この単純な、しかし重大な前提を忘れると、彼の思想のリアリティーは到底掴めない。実際のところ、トマスが生き、呼吸をしていた十三世紀は、どんな時代だったのか。それを知ることが、彼がそのなかでいったい、何を課題として背負い、誰(個人・集団)を意識しつつ、自己の使命を果たしていったのか、を明確にすることももある。

## I 教科書のなかのトマス

トマスの生涯には、人の耳目を恃たせるような劇的なエピソードに乏しい、といわれる。確かに、彼が尊敬してやまなかったアウグスティヌスの波乱に満ちた人生体験と比べてみると、その感は拭い難い。

ことに多感なはずの青年期の、私生活にまつわる面で、このことは決定的ともいえるが、そうしたなかでわずかながら、いかにもトマスのとされる逸話が伝わっている。それは彼の生涯を語る場合、著者たちがこぞってもちだす話であるが、それはまた、いわば「官製の」トマス像の原型とでもいうべきもので、どうしても触れないわ

けにはいかない。だが、それを知るまえに、まずは彼の生い立ちを簡単にみておく。<sup>(2)</sup>

トマスは一二二四年の末か、もしくは翌一二二五年の初頭に、南イタリアはローマとナポリの間に位置する古都市アキノ近郊のロッカ・セッカの城塞で生まれた。父はランドゥルフォ、母はテオドラ、男子四人（もしくは七人）、女子五人、あわせて九人、あるいは十二人という多くの兄弟姉妹の末子である。<sup>(3)</sup>

アキノの領主を父にもち、ナポリ出身の貴婦人を母としたという出生の特色がトマスの人生を決定していたといってもよい。というのも、子弟の初等教育は修道院で受けさせるというのが当時の貴族の慣習であったからだ。それには末の息子は将来、聖職者に、という了解があったのだが、トマスの両親がつよく望んでいたのは彼が一族の声望を担って、ヨーロッパ屈指の大修道院の修道院長になることだった。当時、モンテ・カッシーノの大修道院長は父ランドゥルフォの遠縁にあたるランドゥルフォ・シニバルドオという人物であったことを思えば、そうした両親の期待もうなづける。かくて、五歳のトマスは一族の期待を背にロッカ・セッカ城からほど遠くないモンテ・カッシーノにあるベネディクト会の修道院に「修道志願児童」(obatus)として送られたのである(一二三〇／三一年)。

このベネディクト会に両親によって「奉獻された者」(obatus)としてのトマスは、正式にベネディクト会士になったのだろうか。あるいはまた、年数を経てのち、ベネディクト会士になるべくみずから誓願(professio)を立てたのだろうか。この点については、その可能性は低いとするのが常識的な解釈だろう。ヴァイスハイプルは、トマスが『神学大全』(Summa theologica)のなかで適齢期以前に親の意向で修道生活に「奉獻」されることと、適齢期以後にみずからの意志ですすんで「誓願」を立てることを慎重に区別する議論(II-II, q. 89, a. 5)をおこなっている事実を指摘したうえで、五歳で「奉獻された」トマスがその後適齢期に達する以前に「誓願」を立てて正式

にベネディクト会士になったとは考えられないことだとしている。妥当なところだろう。<sup>(4)</sup>

ともあれ、「サムエルがエリのもとに仕えるべく送られたように」〔サムエル記、二・十一—二十〕、両親によつて、よき生活習慣を身につけさせ、読み書きを習わせるために<sup>(5)</sup>送られたモンテ・カッシーノ山上の修道院の静寂のなかで、五歳のトマスの宗教生活がはじまった。この初等教育の詳しい内容までは伝わっていない。だが、聖書の学習とともに、ラテン語と俗語(イタリア語)の読み書き、初歩的な算数と音楽が教えられたことは確実である。このうち、聖書はとくに旧約の「詩編」を聖務として毎日繰り返し暗誦し朗誦することが義務づけられたようだ。次に挙げるのはその頃のトマスの様子を記した伝記作者グイのベルナルドゥスの言葉である。

「ひとたび修道院に入ると、たちまちにして恩寵がこの幼児をとらえて神の認識へとみちびいたのは驚くべきことだ。彼はいまだ自分自身をも知らぬほど幼く、未経験だったというのに。未来は、他の誰よりもはやく神を追い求めた彼が誰よりもはっきりと神について語ることを示すであろう。すでにして聖霊が彼を引き付けていたので、彼は他の貴族子弟の仲間たちの遊びに走らなかつたし、できるだけ無駄なおしゃべりを避けるようにしていた。独りきりでいるのを好むようになり、手には絶えず子供用の初歩的な教課の記された冊子を携えていた。普通とは思えない成熟した態度を示す物静かな少年だった。口数は少ないが、物思ふことの多く、寡黙で、生真面目で、黙想することに専念しているように見えた。」<sup>(6)</sup>

後年、「シチリアの黙り牛」とあだ名されるようになるのがあたかも必然の道であつたとも思わせるようなくだりである。この時期のトマスについては、グラープマンも「聖浄な修道院を圍繞する山の静謐は、もともと理想的な資質を有する此少年の鋭敏な心胸に、終生変わらざる瞑想・内向・観想への傾向を恵み育んだ筈である。」<sup>(7)</sup>と述べているが、幼児から少年へとむかういちばん大切な人格形成期を、ベネディクト会という観想修道会の深い宗

教的雰囲気のみで過ごしたことはやはり決定的な意味をもったであろう。と同時に、そこで身につけた古典的教養のかたちも見逃すわけにはいかない。いうまでもないことだが、修道院の書庫こそは西ローマの崩壊以降、文化的壊滅状態に陥っていた西欧社会が古典文化の遺産を護りぬいていた唯一の場所であり、その知的空間のなかに教父の文献をはじめとする数多くの書物が内蔵されていた。幼いトマスが分からないながらも、それらの貴重な書籍の存在に畏敬の念を覚えていたことは想像に難くない。のちのことだが、勉学のありかたについて問うた若い学生に対して応えた彼の書簡（「兄弟ヨハネスへの学習法に関する訓戒の手紙」）が如実に示すように、この時期にトマスは間違いなく書物への飽くことのない愛好を身につけたのである。

だが、ここでの静かで、落ち着いた祈りと勉学の生活は長く続くことはなかった。この地一帯はもともとナポリ・シチリア王国（以下、シチリア王国と呼ぶ）とローマ教皇領の二つの勢力が相對峙するはざままで、トマスの父ランドゥルフォはそのなかにあってシチリア王国（神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ二世が国王を兼務していた）の側に身を寄せつつ、巧みにその所領を維持していたのだが、その皇帝と教皇グレゴリウス九世との対立が激化したのである。一二三九年にその対立は頂点に達した。教皇によって二度目の破門をうけたフリードリッヒ二世はこの地に軍隊をさしむけ占領した。他国出身のすべての聖職者が追放され、要塞と化したモンテ・カッシーノにおいても大修道院長は逃亡し、あとに残ったのはわずかに八人の修道士だけであった。このような情況下で皇帝派についていた父ランドゥルフォはトマスをロッカ・セツカの城に連れ帰ったが、やがて新しい修道院長の勧めもあってトマスをナポリの大学に遊学させることになる。約一〇年にわたるモンテ・カッシーノでの生活が終わった。

一二三九年の秋、十四歳のトマスはナポリの大学に入学した。このナポリ大学はトマス入学のわずか十五年前（一二二四年）に神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世の勅許によって設立されたいわば「最初の実学中心の国立大

学」(カントロウィッチ)であった。universitasの組織をとらず、サレルノから移された医学部のほかに、人文学部(教養部)、法学部、神学部からなるstudium generaleで、学生はシチリア出身者に限定せず、教授も西欧各地から優れた人材を招き、時代に即応したカリキュラムが組まれていた。そこにはフリードリッヒ二世の文教政策、つまり当時ローマ教皇の支配下にあった法学研究で有名なボローニャ大学(そしてパリ大学も)に対抗してシチリア王国の国威を大いに発揚しようとする政治的意図があった。<sup>9)</sup>

トマスはナポリ大学の人文学部(Facultas artium)に在籍したようである。そこで受けた授業の詳細はよくわかっていない。伝統的な三学(文法・論理〔弁証〕学・修辞学)・四科(算術・幾何・音楽・天文学)の七自由学芸が厳格に教授されていたわけではなかったらしいが、それらの基礎的学科目の修得のうえに主に論理学と自然学を学んだと考えられる。

約五年間のナポリ大学の生活のなかで、トマスの体験した二つの出来事が特筆に値するというのが研究者たちの一致した指摘である。一つはトマスの学問・思想形成に重要な影響を与えることとなる異教のアリストテレス哲学との最初の出会いであり、いま一つはより直接的に彼の人格形成に甚大な働きをおよぼすこととなるドミニコ会への入会である。

前者については、それがトマスの学問・思想体系そのものに係わる問題であるので、詳しくは稿を改めたい。ここではただ十三世紀初頭の西欧の諸大学のなかでアリストテレス研究の中心となっていたのがほかならぬナポリ大学であったこと、それにはC・H・ハスキンスがつとに指摘したように、自身イスラム諸国の君主や学者たちと科学的な話題について文通を続けたフリードリッヒ二世の強力な支持があって、アリストテレスの著作(アヴェロエスとアヴェイセンナによる註解を含む)の翻訳——実際、一二二七年頃、それまでアラビア語からの翻訳活動の中心

人物であったミカエル・スコトゥスをスペインのトレドからナポリ大学に招いたのもフリードリッヒである——が盛んにおこなわれていたこと、そしてこの事実は再三にわたってアリストテレス研究の禁令を受けたパリ大学の場合と著しい対照を示している、という点を確認するだけにする。

問題は後者、トマスのドミニコ修道会への入会である。スペイン生まれのドミニクス・デ・グスマンによって創立され、教皇ホノリウス三世から正式の認可を与えられた（一一二六年）この托鉢修道会——正式名称は「説教者兄弟修道会」(Ordo Fratrum Praedicatorum)——がナポリに進出したのは一二二七年のことで、トマスがこの都市にやってくるわずか十二年前のことであった。白衣の上にウールの黒い袖無しマントといういでたちで、町のあちこちを説教しつつ、物乞いをして歩く修道士たちの姿はトマスの心を激しく揺さぶった。それは同じく清貧、従順、貞潔を旨としつつも、俗世から隔絶した山野で「祈りと労働」の静かな共住生活を営むそれまでの修道士のありかたとは明らかに異なっていたからだ。彼らはイエス・キリストの福音に立ち戻ることをつよく主張し、都市の一般信者の側に身を寄せて徹底的な清貧にもとづく使徒的生活を実践していた。トマスはのちに『神学大全』(Summa Theologiae)のなかで、たんに「観想」することよりも「観想したことがら」を「教授」し、「説教」する托鉢修道会の観想修道会に対する優位を語ることになる(II-II, q. 188, a. 6)が、この福音の説教者たることの深い自覚に突き動かされて熱心な学問研究に励むドミニコ会の活動は若いトマスの魂を完全に捉えたのである。だが、トマスのドミニコ会入会は彼の家族にとっては断じてあつてはならぬ暴挙であった。おそらくトマスには、修道士個人の私有財産は否定しながら団体としての修道院の蓄財は容認し、結果として富裕化し貴族化していった従来の修道会のありかたとは根本的に異なって、托鉢によって生活を維持し清貧、学問、説教を特徴とする新しい修道会のそれはなにもにも変え難い魅力と映ったのである。しかし、まさにその点こそが、末の息子を一族の名譽にかけ

て大修道院長に、と願う家族の怒りを買ったといつてよい。こうして、実の母と兄たちによるトマス奪回と、有名な監禁事件が起こることになる。

ことの推移はこうだ。ナポリのドミニコ会はトマスの入会を諸手を挙げて歓迎したが、それにつよく反対する家族の動きを察知してトマスをパリに向かわせた。だが、パリへの旅の途上、教皇領から出てトスカナのアクアペンデンテ付近で休憩をとっていたトマスとその一行は兄レジナルド（このとき、彼はフリードリッヒ二世の遠征軍のもとにいた）に見つかり、トマスは有無をいわさずサン・ジョバンニ城へ、そしてそれから母の待つロッカ・セツカ城へと連れ戻される。この監禁はほぼ一年間（一二四四—一二四五年）に及ぶことになるが、その間、家族はさまざま手をつかつて、トマスの翻意をうながし続けた。だが、トマスの決意は堅く、ある日、あのよく知られた事件が起こることになる。次に挙げるのはトマスの最も古い伝記作者トッコのギレルムスによる描写である。

「兄たちはこうした不当なやり方では効果がないとみて、もう一つ別の種類の屈服の手立てを考えた。それを採用すれば、ここかしこの塔の土台は崩れ、岩は砕かれ、レバノンの杉も根こそぎにされるのが必定だ。この戦闘に巻き込まれない者はまずいないが、それはまことに困難な闘いなので、勝利者となる者はきわめて少ない。

そこで兄たちは、監視の下でひとり寝起きしているトマスの部屋に、娼婦のごとく着飾った、人の魂を抜き取るかのように美しい少女を送り込んだ。彼女はトマスに流し目をおくり、馴れ馴れしく近づいて、愛撫をし、可能なすべての手管を駆使して彼を籠絡しようとした。<sup>1)</sup>」

だが、トッコの筆によると、「すでに神の叡知と契りを結ぶことを選んでいた、我らの志操堅固な若者」は「肉の衝動の沸き起こるのを身体のうちを感じはした」が、すぐに「燃えている薪を炉から引き出して、少女を部屋から追い払い」、「その薪の燃えさして部屋に十字架の印を書き付けた。」という。そしてそのあとで、「床に伏し、

泣きながら神に祈った<sup>(12)</sup>」というのである。

ずっと後のことだが、トマスが死去し、やがてトマスを聖人に、という動きが起きたとき、ドミニコ会シチリア管区からその列聖運動の推進者に任命されたのも同じトッコであるが、かれはナポリで行われた列聖調査会においても、これと同様の証言を繰り返している。念のため、トッコの証言を聞いてみることにする。

「そこで兄たちはトマスが完全に思い止まらるるよう期待して、きれいに着飾った、大変な美貌の少女を彼のもとに送り込みました。彼を罪へといざなうためであります。その瞬間、肉の衝動が身のうちに沸き起こるのを感じはいたしましたが、彼は燃え盛る薪を炉から引き抜きまして、憤然として美女を追い出しました。それから部屋の隅に行って、その燃えさしで壁に十字架の印を書き付けたのであります」<sup>(13)</sup>」

この話は人びとによほどつよい印象を与えるものであるらしい。同じくトマスの古い伝記作者であるグイのベルナルドゥスも、これについて詳細に語っている。

「そこで一人の愛らしいが、破廉恥な少女、人の姿をした毒蛇が、淫らな言葉と愛撫によってトマスの無垢な心身を墮落させるために、彼が独りである部屋に送り込まれた。しかし少女が期待していたのとはちがって、そこにいたのは一人の人間ではなく、天使であった。……トマスの若い肉体は肉の衝動を覚えはしたが、それは賢く力強い魂によって直ちに抑制されたのである。……部屋のなかで燃えている炉に近づき、トマスはそこから燃えさしを掴み、欲情の焰の運び手である、誘惑する女を追い出した。そのとき彼の精神はいまだ燃えさしを燃えさしで十字架の印を書いた。そうして泣きながら床に倒れ、永続的な貞潔の恵みを得られるようにと神に祈ったのである」<sup>(14)</sup>」

さて、まえに触れておいたことだが、トマスを語る場合に必ずといってよいほど引用される逸話とはまさにこの

話にはかならない。巷間伝えられてきたところのトマス像、つまり「聖人トマス」という官製の像を作り上げるのにこれほど打ってつけの材料はないであろう。

余談だが、後年トマスは「天使的博士」(Doctor Angelicus)と讃えられることになるが、その背景の一つにはこのグイのベルナルドゥスの言葉があるようだ。なにしろ、「そこにいたのは、一人の人間ではなく、天使であった。」<sup>(15)</sup>というのだから。だが、こんな穿鑿はともかくとして、問題にすべきはこのようなトマス像がいったん形成されると、トマスという一人の生身の人間、実存としてのトマスがたちまちのうちに消えうせてしまう点である。その結果、残されるのは最初から非のうちどころのない、完璧人間としてのトマスという像であり、そこには彼がいかに時代との格闘のすえに自己の思想を打ち立てるにいたったか、についての想像力が入り込む余地が閉ざされることになる。こうした教科書のなかのトマスから解放されること、このことがトマスに近づくための必要不可欠なステップだといっておきたい。

## Ⅱ 〈中世の夏〉——十三世紀

「十三世紀は多くの人びとによって、中世文明の絶頂期と考えられている。そしてそれには十分な理由がある。ゴシック様式の建築や彫刻がその古典的な完成に達したのはこの時代であったし、絵画や自国語による文学の新しい出発をみたのもこの時代であった。哲学や神学において、スコラ学における論理学的方法の発展は、アリストテレスの著作の再発見と相俟って、前代の極めて曖昧な思弁に対して鋭い対立をみせた。経済生活においても、この時代は膨張の時代であり、その原因は一層容易になった交通の発達とブルジョア商人階級の力による諸都市の全き

成長のおかげであった。そしてそれにもなつて、漸進的な人口の増加が東および中央ヨーロッパにおける新たな植民化と回教徒からのスペインの再征服によって捌口をみいだした。至るところで、服飾や生活様式やものの考え方にとつて一層複雑化する傾向があった。恋愛や法において、あるいは経済や倫理において、人びとはもはや封建的世界の粗雑さが自分たちにふさわしいものだと感じなかった。」<sup>(16)</sup>

中世政治思想家 J・B・モラルの言葉である。トマスの生きていた十三世紀という時代の俯瞰的眺望が得られるだろう。

確かに、西欧の中世という時代をひとまとめに鳥瞰的視点に立つて眺めれば、十三世紀がその絶頂期であるというのは歴史家たちが一致して主張してきたところである。この点を手っ取り早く確認したいと思うのなら、中世史家 J・R・ストレイヤーの代表的な概説書 (*Western Europe in the Middle Ages, 1955.*) を繕くだけで済むことだ。この書のなかで彼はローマ帝国の崩壊から近代の開始にいたる間の長い中世の期間を四季の移り変わりにたとえている。それによると、十二世紀までの西欧中世は長期の「冬」であり、それから十二世紀の大地に明るい「春」が訪れ、十三世紀はそれをうけて最盛期たる「夏」の季節となり、そうしてその世紀以後は徐々にすべてが衰退していく「秋」へと向かっていくのである。<sup>(17)</sup>

〈中世の夏〉—— 実際、十三世紀を表するのに、これほどの確な表現はない。この世紀は西欧社会が真に文化的開花を示した「十二世紀ルネサンス」を継いで、さらに独自の文化発展をきわめた時代だった。冒頭のモラルの指摘を繰り返すことになるが、ゴシック様式の建築、絵画や自国語による文学の新しい出発、スコラ学における論理学的方法の発展、アリストテレスの著作の再発見、経済生活における膨張、交通の発達とブルジョア商人階級の力による諸都市の成長、漸進的な人口の増加、新たな植民地、回教徒からのスペインの再征服など、枚挙に暇のない

ほどだ。

こうした西欧十三世紀の世界がトマスの生涯に決定的な影響を及ぼした三つの現象として、ネメシエギ神父は  
 (一) 前世紀の十二世紀からはじまった社会全体のダイナミックな刷新 (二) アリストテレス哲学の流入と受容

(三) キリスト教信仰の新しいあり方、つまり福音的信仰の復興 を挙げている。<sup>(18)</sup>

実際、(一) この世紀に都市の急速な発展があったことは実証済みである。交通網が拡大し、商人階級が社会的に上昇し、人びとはもはやそれまでの封建制的社会関係や生活様式では立ちいかないことを痛感していた。都市のギルド(組合・団体)と同質の存在として、新しい学問の場たる大学が成立し、皇帝や王の世俗勢力、教皇や司教の宗教勢力と並ぶ社会的な力となった。ナポリ、ケルン、パリ、ローマと自由に往来しえたトマスの活動はこういう社会の激しい動きなしにはけっして可能ではなかった。

さらに、そうしたなかで(二) 異教のアリストテレスの著作が怒濤のごとく西欧社会に流入してきた。彼の若干の文献はそれ以前にも論理学を中心に知られていたが、いわゆる「十二世紀ルネサンス」におけるギリシア語、アラビア語のラテン語への活発な翻訳活動や、ちょうど当時トルコの侵入によってコンスタンティノープルから西方へ逃れてきた東方の学者たちによる大量の写本の持ち込みを通じて、十三世紀にはその自然学、形而上学、倫理学、政治学が紹介されるにいたった。このアリストテレスの新しい哲学が西欧社会に与えた衝撃と影響の大きさは計り知れない。

そして、最後に(三) 福音的信仰の復興である。この時期に人びとは従来の教会の権威主義的な教職制度に安住しえなくなった。俗世から離れた地点で禁欲的苦行や瞑想的・神秘的生活に耽る修道者の信仰態度にも飽き足らなくなった。アッシジのフランシスコのように、人が貧しい者たちのただ中で小さな兄弟として共にキリストの福音

を生きることこそが理想とされた。フランシスコ会とドミニコ会の二つの托鉢修道会の創設はまさにこの精神の現れである。

さて、中世の「夏」と形容される十三世紀、トマスが確かにそのなかで呼吸をしていたこの世紀のおおまかな季節的な雰囲気は以上の叙述である程度は掴めるであろう。だが、いま同じこの十三世紀をもう少し政治的な視点から眺めてみれば、その風景はどういうふうに見えるだろうか。

「明ければ西暦一二二五年が始まろうとしていた頃、トマス・アキナスはナポリの近くのロッカセッカ城で、アキノの名門ランドルフ伯爵の第七番目の息子として生まれた。イングランド王ジョンがラミニードで大憲章に署名してからちょうど十年、スペイン人のドミンゴ・デ・グスマンがローマに赴いて、彼の名を冠する修道会を設立してからも同じ年月が経っていた。現在のイギリス、フランス、ドイツそれにイタリアがその中に入るヨーロッパ大陸はローマ・カトリック教会と神聖ローマ帝国であった。このラテン語文化のヨーロッパは、スペインでグラナダのイスラム教徒と境を接し、バルカン諸国の地ではビザンティウムの東ローマ帝国と境を接していた。そして中東では、弱体化していたが、十字軍のエルサレム王国に植民地を維持していた。神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世はドイツからシチリアに至る地を支配し、その国際的な関心の広さによって当時の人々をあっけにとらせたのであった。彼の野心は歴代のローマ教皇の野心と衝突し、十三世紀初めのイタリアは絶えまない争いの舞台と化していた。」<sup>(19)</sup>

オックスフォード大学の哲学教授 A・ケニーによるトマス入門書の冒頭の一節であるが、トマスの時代の政治的大状況がよく伝わる文章である。

前節でも若干触れたが、この時代、西欧世界の政治的主導権を握っていたのは神聖ローマ皇帝フリードリヒ二

世 (1212-1250 在位) だった。時に「王座に位した最初の近代的人間」(ブルクハルト)といわれ、「世界の脅威 (stupor mundi)」(マッシュー・パリス)、「驚くべき変革者」(immutator mirabilis)とも称せられる。シチリア生まれの彼は齡四歳にしてシチリア王となり、十二歳にして教皇インノケンティウス三世の後ろ盾によって時の神聖ローマ皇帝オットー四世の対立国王となった。オットーを打倒して皇帝の地位に就いたのはその三年後、フランス王フィリップ二世の支持を得てのものであった。

中世の教皇庁がかつて出会ったことのない最強の政治的敵手というのが、フリードリッヒ二世に対する歴史家の一般の評価であるとい<sup>(21)</sup>ってよい。彼が皇帝としてドイツに滞在した期間が実際には一〇年に満たなかったという事実ほど彼の統治政策の機軸を明らかにするものはない。彼がなによりも重視したのはシチリアとイタリアであった。このことは「伝統的にドイツ国内におかれてきた帝国の心臓部が、彼の治世になってはじめてイタリアの地に移った」ことを意味する。祖父フリードリッヒ・バルバロッサの血を受け継ぐ者として彼は古代ローマ帝国の故地イタリアに殊のほか執心し、「帝国の発祥の地であるローマ市を我々が尊敬しない限り、人々に帝国を尊敬させることはできない。」<sup>(22)</sup>と言いつつ放った。彼の作った有名なアウグスターレスなる金貨に彫られているカエサル像と「カエサルのはカエサルに返せ」という銘がローマ教皇に対して本来の宗教的權威を逸脱しないこと、つまり聖ペテロの使命に徹せよという明白なメッセージであることはいままでもない。

この古代ローマ礼讃の振幅をいっそう上げたのがシチリア振興政策だった。シチリヤ島は西欧・ギリシア・アラブの三つの文明の出会いの場であったが、彼はその地に強力な中央集権的、官僚制的統治機構を作り上げることによって自己の支配のコスモポリタンの性格を内外に誇示したのである。しかも、その露骨な異国趣味、サラセン文化の愛好ぶりは当時の西欧人たちに異様な印象を与えずにはおかなかった。その後宮にはサラセンの美女たちが住

まい、旅するときには沢山の珍獣が供をした。『鷹狩り術』を著して科学的、合理的な志向を示すとともに、『シリアの質問』を執筆してアラブの形而上学的知恵への傾倒を隠さなかった。彼が創設したナポリの王立大学がローマ教皇支配下のボローニャ大学への対抗心から生まれたものであるのは上述した通りである。

聖地イェルサレムへの十字軍遠征を教皇に誓っておきながらその約束を十年間遅延させ、怒った教皇（グレゴリウス九世）によって破門されると、一転して軍を差し向け、暫定的に聖地回復に成功（それ以前、彼はイェルサレムのヨランダ姫と結婚し、イェルサレム王の称号を得ていた）し、教皇との和解を成し遂げた。こういう権謀術数にたけた政治行動のひとつを見つめるだけで、「シチリアのキマイラ」という彼の呼称があながち大袈裟なものともいえないことがわかるであろう。ブルクハルトがルネサンス君主、すなわち「十四世紀の専制君主」の最初の典型としてこのフリードリッヒ二世を取り上げているのはよく知られたところである。<sup>22)</sup>

ところで、フリードリッヒ二世が没したのが一二五〇年、五六歳の時のことであるが、この年トマスは二五歳の青年期のただ中にあり、ケルン大学で師アルベルトウス・マグヌスのもとに学んでいた。トマスが死去するのはそれからさらにはぼ四半世紀後のことである。したがって、トマスの生涯を大きく包み込む時代の政治的背景のなかで捉えようとする場合、ひとりフリードリッヒ二世の治世だけを見るのではいまだ足りないことになる。そしてそれは確かにその通りなのだが、それ以上にいまここで是非とも確認しておかねばならないのはこのフリードリッヒの死、すなわち神聖ローマ帝国シュタウフェン王朝最後の皇帝の死が中世政治史の大きなうねりのなかでドイツにおける皇帝不在の時代、いわゆる「大空位時代[Interregnum]」(1256-1273)をもたらしたという冷徹な歴史的事実のほうであろう。この空位時代はかたちのうえでは一応一二七三年のハプスブルク家のルードルフ一世の即位によって終わることになるが、帝国の領邦国家への分裂はもはや決定的となり、再びもとの秩序に戻ることはな

かったのである。

そして、この一二七三年という年にこだわってみると、その翌年(1274)にトマスが死去していることに気づく。ということは、この空位時代がトマスの後半生とほぼ重なっていることを意味する。この事実は期せずしてトマスの時代が実は教皇と皇帝との提携を軸として成立してきた二中心的・権力的な中世世界、つまり普遍的な「キリスト教共同体」(Res publica christiana)の崩壊期にあたっていることを示すであろう。言い換えれば、トマスが実際に生きていた世紀とは言われるほど安定した、落ち着いた時代であったわけではなく、むしろ絶頂期に達した中世世界が徐々に緩慢なカーヴを描きながら解体期へと入って行く境目に位置しているとみていいのである。

フリードリッヒ二世の死に端を発する十三世紀後半の西欧の政治的状况の詳細に関しては、他の文献に譲るほかはない。<sup>(3)</sup>ここではただ、大空位時代に象徴されるように、皇帝権にはつきりと翳りが見え始めたこと、それにともなつて実は教皇権も対抗者を失ったために昔日の勢いをもはや保ち得なくなつていったこと、このドイツとイタリアの凋落に代わつてイギリス、フランス、アラゴン、カスチラなど新興の世俗国家が台頭していったこと、そしてその過程にイタリアではゲルフ(教皇派)とギベリン(皇帝派)の対立が、フランスとイギリスでは両国間の複雑な対抗関係においてフィリップ・オーギュストやヘンリ三世、シモン・ド・モンフォール、シャルル・ダンジューらの活動が目につくこと、などを確認するだけにとどめたい。世にいう「シチリアの晩禱」や「アラゴン十字軍」といった民衆蜂起と個別国家の覚醒、あるいは中世教皇権の死命を決定的に制することとなる、教皇ボニファキウス八世とフランスのフィリップ四世の対立と、後者による前者の逮捕と幽閉——「アナニー事件」および「教皇のバビロン幽囚」——といった中世的秩序の崩壊を告げる一連の諸事件は十三世紀と十四世紀の交に起こる出来事であり、さしあたりはトマス死後のことに属する。

ともあれ、こうみてくると、〈中世の夏〉と位置付けられる十三世紀という時代は意外にも世評とはいささか異なっていて、繁栄と安定の世紀というよりも、次に確実に訪れるであろう巨大な解体現象の予兆を窺わせるどこかしら不安で不吉な世紀だったというほうがあたってはいるかもしれない。そしてまさしくこういう時代の雰囲気の中にトマスは自己の生の輪郭を形作っていたのである。

### Ⅲ 歴史舞台の上のトマス

数多ある西欧中世史の概説書のなかでもF・ヘーアの『ヨーロッパ精神史』（一九七〇年）は論題の独特の取り上げ方——各章の「表題」にそれが端的に表れている——において、異彩を放っている。<sup>24</sup>そこには、二〇世紀の初頭のウィーンに生まれ、カトリックの進歩的ジャーナリストとしての経歴ももつこの歴史家の、「歴史」に対する独自の思いが込められている。「皇帝フランツ・ヨーゼフの帝国、他民族の帝国、旧オーストリア、『未完成交響曲』のよりに多彩な色と響きをもった世界」に生まれ、同じ「オーストリア人アドルフ・ヒトラーの配下の者と闘うなかで生長」したと自らの出自を語りながら、「ヨーロッパとは千年以上にもわたるひとつの内乱」であり、「ヨーロッパという白人の文明」を「ひとつの悲劇的で、危険きわまりない、すぐにも爆発しかねないものとして、他の文明の人々に何ほどかのことを伝えること」が自己の使命であり、「新しい文明は、いっさいの人種、いっさいの文明が紛糾する只中で響く和音の中でしか、生きることができない」と著者は言うのである。<sup>25</sup>

こういう視点で書かれている同書の第八章の表題は私たちの現在の問題関心からみても、まことに注目に値する。すなわち、『トマスの時間（一二二五—一二七四）』というのがそれであるが、西欧中世の十三世紀の「精神

史」を著者はまさにトマスというたった一人の人間の生きた時間によって代表させている。その冒頭の文章を引いてみる。

「フリードリッヒ二世がつくった最初の学校のあるナポリが、アヴェロエス主義から、次の世紀に『新プラトン主義的』汎神論となりシャルル・ダンジュウの支配となる間に、トマス・アクィナスの生涯が横たわる。トマスの仕事は次のいくつかのことを前提としている。すなわち、『神聖ローマ帝国の皇帝』に対するゲルフ党の教皇権の勝利、『啓蒙主義的な』地中海君主の台頭、予言者的な精神主義の衰え、乞食修道会同志の争い、である。新しくできた大学は、イスラム諸侯の宮廷に行われていた論争や対話の習慣を相続して、パリ大学は互いに非常に異なったキリスト教、汎神論、無神論、『自由思想』の学説と人物の対決の場所となった。」<sup>(26)</sup>

こういう前置きをおいたうえで、ヘーアの筆は三つの文化圏（キリスト教・ユダヤ教・イスラム教）に跨がったフリードリッヒ二世の宮廷文化の広域性と革新性について触れたのち、「学校の学問」としてのスコラ学と大学の関係に、そしてその大学（とくにパリ大学）に生まれたトマス主義的なスコラ学について論じている。それによると、大学は「西方の『自由世界』の教皇、諸侯、都市国家の競争のなかに生まれ」、「大学管理者、教授、学生、市民の間の絶えざる争いの中に、ヨーロッパの自己発見として、三つの輪の世界の宮廷社会、知識階級の討論の相続者として生まれた」<sup>(27)</sup>ものである。サント・ジュヌヴィエーヴとサン・ヴィクトルの修道院学校、ノートル・ダムの司教座聖堂学校が寄り集まり、フィリップ・オーギュストの認可を受けて成立したパリ大学（一二〇〇年）はやがてパリ司教、教会、王侯、教皇庁のパリの機関との絶えざる摩擦と軋轢を繰り返すようになる。そこにはその思想的誘因のひとつにベネのマルリッヒとディナンのダヴィドのもたらしたバロック的神秘的汎神論と、とりわけアリストテレスの自然哲学的書物に対する対処の仕方如何の問題があったのだが、一二一七年にはドミニコ会士が、一

二二九年にはフランシスコ会士がパリに来て、パリの「古い」神学の動揺がはじまった。その様子はヘーアの叙述によると、こうなる。

「宗教的に動揺した者は乞食修道会に押しかけ、世俗的に心を動かした者は法律研究に向かい、知識人たちは自由学芸〔人文〕学部を急いだ。一二五二年にまさに乞食修道会は大学と数十年にわたる争いに巻き込まれた。この争いの中で大学はますます国家主義的になってゆき、ソルボンヌは修道司祭と（教皇庁的な）国際主義とに対する、在俗司祭の拠点として知られるようになる。革命家として、招かれざる客としてトマスは一二七〇年とそれ以後この大学によって裁かれるようになる。」<sup>28</sup>

さて、ヘーアのこの叙述は、十三世紀中葉にドミニコ托鉢修道会に属する修道士であり、同時にパリ大学神学部教授としてのキャリアをもつて知的活動をおこなった知識人トマスの置かれていた歴史的・社会的関係と構図をよく明らかにしている。あとで確認するように、トマスの社会・政治思想——それが私たちのもっぱらの関心であるが——を知ることのできる著作が書かれたのもまさにこの時期であるだけに、この間の位置関係と構図を押さえておくことは是非とも必要である。だが、「在俗」〔「教区」〕司祭の拠点としてのパリ大学と、「乞食」〔「托鉢」〕修道会とが一二五二年以降、数十年にわたる抗争を続け、しかもそのなかでトマスは「革命家として、招かれざる客として」扱われ、一二七〇年以降にはそのパリ大学によって「裁かれるようになる」というヘーアの記述については、もう少し補足説明をしておいたほうがよさそうである。<sup>29</sup>

いま大学、なかならずパリ大学の成立事情に関する詳細な説明はいっさい省略する。<sup>30</sup>すでに内外の優れた研究の十分な蓄積があるからだ。問題は端的にいうと、一二五二年という年——ドミニコ会士としてのトマスが最初にパリ大学と係わったのはまさにこの年である——に、何ゆえにパリ大学と托鉢修道会とが長い対立関係に入っている

たのか、という点にある。外面的にいえば、その答えは簡単である。すなわち、世紀の初頭からこの大学の中心であった神学部 (facultas theologiae) —— パリ大学は人文学部、法学部 (ただし、市民法は一二一九年以後、禁じられていた)、医学部および神学部の四学部を擁した—— の中枢を構成してきたのは「教区」司祭からなる教授団であったが、その教授団のなかにドミニコ会やフランシスコ会などの新しい「托鉢」修道会に属する司祭たちが参入してきたことに対する教区司祭教授団の反発がそれである。この反発の実際のところを知るには、中世大学史の權威のひとり、ジャック・ヴェルジェの言葉を聞くのがいいだろう。

「托鉢修道会の教師は大学に特有の問題を考慮に入れることなく、自分の修道会の利益のためにのみ行動し、司教に対する自立性、謝礼金といった在俗の同僚たちの関心事に煩わされなかったのである。彼らは全く謝礼金を要求しなかったので、他の学校をやめた学生を惹きつけたが、修道会長の命令のみに従って、大学の決定には従わなかった。つまり、托鉢修道僧は大学『団体』の擁護には何ら寄与しないまま、在俗教師の職と学生とを奪う形勢を示していたのである。／＼すでに一二二九—三一年の大規模な四散の時に、托鉢修道僧たちは大学と行動を共にしなかったばかりか、在俗教師の不在につけこんで、仲間の一人に大法官から直接に神学の『教授免許』を授与させた。その人物はクレモナーのロランドであり、ドミニクス会出身の最初の神学教授となった」<sup>(31)</sup>

ここで「一二二九—三一年の大規模な四散」というのは、この時期、大学とパリ市当局との間で司法権限をめぐる紛争が起こり、市の対応に抗議した大学側が一方的にストライキ宣言を発してパリから教授と学生が去っていた事態を指している。<sup>(32)</sup> このただ中でクレモナーのロランドが最初のドミニコ会所属のパリ大学神学部教授となったというのだが、彼はもとボローニャ大学人文学部の教授で「ボローニャの栄光」と謳われた人物であった。この就任はドミニコ会がパリ大学に進出してわずか一〇年あまりのことであり、托鉢修道会 (フランシスコ会も含む) の目

覚ましい係わりぶりがわかる。が、それはともかくとして、パリ大学において教区司祭教授団の、托鉢修道会員教授に対する反感が何処にあるか、はこの引用文からある程度明らかになるだろう。つまり、みずからを自治権をもった、独立した法人団体—ギルド (universitas) とさせるべく世俗権力や教会権力、なかならずパリ司教の裁治権からの自立を不断に図ってきた前者の眼からみると、後者の振る舞いは長年積み上げて来た大学の学則や慣行をたんに無視するものというだけではなく、はじめから自分たちの修道会の規則やローマ教皇の権威を優先させ、それにのみに忠実であろうとしている確信犯的なそれに映っていたのである。

ナポリ近郊のロッカ・セツカ城に生まれ、幼年時にモンテ・カッシーノのベネディクト会修道院に送られ、長じてナポリ大学で学び、その地でドミニコ会に入会してパリに移り、そこでアルベルトゥス・マグヌスに師事し、やがて師にしたがってケルン大学で学的研鑽を積んでいたトマスが「教授候補者」としてパリ大学神学部によってきた一・二五二年という年の、パリ大学内の雰囲気は、実にこのような托鉢修道会に対する教区司祭教授団の反感が一挙に高まった年であった。この時点で、パリ大学神学部の講座は全部で十二であったが、このうち三講座はノートルダムの参事会に留保され、残りの九講座のうち托鉢修道会の占めていた講座は三つ（ドミニコ会が二、フランシスコ会が一）で、他の六講座が教区司祭によって占められていた。だが、この全講座の半数という数は托鉢修道会によって脅かされかねず、彼らの反感は同年二月付の〈神学部規約〉にまとめられることとなる。その内容は、

(一) 現に講座をもたない修道会は今後ともたないこと、(二) 現に講座をもっている修道会は、今後は各一講座で満足すべきこと、(三) 今後神学のマグステルとならうとする者は、現在マグステルの下で十分に修学したことが実証されていること、の三点であった。その狙いがドミニコ会の第二講座の非合法化、フランシスコ会の第二講座への動きの阻止、そしてシトー、クリュニーなど、パリに学生を送り込もうとする他の修道会への先制攻撃であった

ことはいうまでもない。<sup>(33)</sup>

こういう事情を知れば、さきのヘーアの言葉を繰り返すが、トマスという人物がパリ大学側からしてみれば、まさに「招かれざる客」だったということはもはや容易に想像がつくというものだ。彼はほかならぬドミニコ会のもつ二つの教授枠の一つに就任する予定の「教授候補者」として師アルベルトゥス・マグヌスの推薦を受けてパリ大学神学部によってきたのだから(ちなみにフランススコ会の候補者はボナヴェントゥラ)。ここでこの時期(一二五〇年代)にパリ大学において激しく続いた教区教授団と修道会側との間の抗争——両者の対立は先の〈神学部規約〉の可否をめぐって教皇庁を巻き込む一大事件に発展していく——の詳しい経緯について触れることはしない。<sup>(34)</sup>ただトマスのパリ大学での活動(第一回パリ大学時代・一二五二—一二五九年)がはじまったのがこのような紛争の騒然たる雰囲気のだななであったことだけは再度確信しておこう。彼が最終的にパリ大学神学部の教授免許を教皇庁の指令によって与えられ、就任講演をおこなうのは一二五六年二月、国王(聖ルイ九世)の軍隊に守られてのことであり、それより先の一二五二年、教授候補者としてペトルス・ロンバルドゥス『命題集』の連続講義を開始したのは反托鉢修道会の急先鋒、サンタムールのギヨームの指導によって大学がストライキに入っていたさなかのことだった。A・ケニーの表現を借りれば、それは確かに「スト破りの最初の連続講義」<sup>(35)</sup>だったのである。

トマスの、パリ大学神学部教授としての第一回目の活動はざっと以上の通りである。その環境は托鉢修道会に向けられた在俗(教区)司祭の教授団の激しい敵意に根差したまことに不穏としかいえないような大学紛争のそれとということになるが、その殺伐とした空気に真っ向から応戦するなかで生まれた最大の成果が『命題集註解』全四巻(*Commentum in Quator Libros Sententiarum Magisteri Petri Lombardi*)であることは記憶されねばならない。

この書はのちに生み出される『護教（対異教徒）大全』、『神学大全』と並ぶ、彼の神学に関する三つの総合的・体系的著作の最初のものであって、彼の社会・政治思想に関していえば、とくに聖俗二権の関係への言及（II, dist. 43, qu. 3, art. 4.）がある。

この第一回パリ大学時代の、忘れてならぬ著作としては、サンタムールのギヨームの托鉢修道会攻撃の書『現今の危険思想について』に対する直接の反論『神の礼拝と尊崇を攻撃する者たちへの論駁』のほか、『存在者と本質について』、『自然の諸原理について』、『ポエティウス三位一体論註解』などがあるが、ここではこれらの著作に拘泥するのはやめる。「講解（聖書を教義学的に講義）し、討論（諸問題を討論裁定して解決を与える）し、説教する」という神学教授本来の任務を営々と果たして、トマスは一二五九年六月、ヴァレンシアンヌでのドミニコ会総会への出席を命じられる。

世にその名を知られる一個の思想家として歴史舞台の板の上にはじめて乗った通算八年間のパリ大学神学部時代のトマスの学問的活動を、いま私たちの限定された関心に沿って彼の公的な生涯の芝居の第一幕目とみるならば、第二幕は一二五九から一二六八年にいたるイタリア各地での教授活動である。<sup>(36)</sup>この時期、彼の足取りはドミニコ会の方針にしたがって、総会の開かれたヴァレンシアンヌからイタリアへ入り、主にローマ、アニヤーニ、オルヴィエト、ローマ、ヴィテルボと移っていく。ここでも細かいことはいっさい省略する。要はその各地のドミニコ会修道院で記憶に残る仕事に着手し、生涯忘れてはならない友と出会っていることだ。

まずはなによりも特筆すべきこととして、教皇ウルバヌス四世の宮廷のあったオルヴィエトでのモルベカのゲルムスとの出会い。この高名なドミニコ会士の翻訳家との邂逅がトマスにアリストテレスへの眼を開かせ、その研究を大いに進捗させる道を拓いたことはいまでもあるまい。そして、それに先立つ、これも終生の同僚ジペルノ

のレギナルドゥスとの出会い。彼が以後、終始トマスの身边に寄り添い、トマスの口述筆記をおこない、『神学大全』の残余の部分を引き継いだことも語るまでもないことだろう。

一方、著作は次の通りだ。まず『対異教徒大全』(Summa contra gentiles)——『哲学大全』ともいわれる——が挙げられる。すでに言及したように、彼の三大体系書のうちのひとつだが、スペインに派遣された同志たちにイラム教徒とユダヤ教徒との論戦のための学問的・実践的な手引きとして執筆されたものだ。パリ時代に稿が起され、この時期に完成されている。この書もたとえば人間の社会的本性を指摘している点(III:II)などにおいて、私たちの関心から外せない。『黄金の鎖』、『ギリシア人の誤謬に対する論駁』、この二書はギリシア教父とラテン教父との調停を望んでいたウルバヌス四世の意向に応えるものとして書かれた。そしてなんとしても落とすわけにいかないのは、最大の著作『神学大全』の執筆開始である。ときに思想のゴシック建築と謳われるこの大書(三部からなり未完)の構想されたのは一二六五年ローマにおいてであり、その第一部の完成はおなじローマ時代の一二六六—一二六八年というのが通説である。詳細はこれも稿を改めて触れることにするが、第二部が一二六九—七二年のパリにおいて(すなわち第二回パリ大学神学部教授時代)書かれ、第三部の執筆は最晩年のナポリ滞在中のことで、完成されることはなかった。

そして、歴史舞台の第三幕目のトマスの姿を見出す場所は、一二六九—一二七二年にかけてのパリである。<sup>(97)</sup>一二六九年初頭、アヴェヴィユのジェラルド——彼は、一〇年前の紛争の結果追放処分を受けパリを追われていたサンタムールのギヨームのつよい影響下にあった——らによって再度激しく燃え上がっていた托鉢修道会攻撃に対処するべくドミニコ会から同地に、トマスは呼び戻される。第二回目の神学部教授時代がはじまった。

この時期におけるパリ大学内の対立はしたがって、さしあたりは托鉢修道会に対する神学部の教区司祭教授団に

よる積年の怨念の爆発と、それに対する前者の一步も引かぬ応酬というすでに出来上がった構図の繰り返しを特徴としている。だが、そこにはまた、それ以上にまったく別種の新たな火種が付け加わって、教区司祭教授団に対抗して共同戦線を張っていたドミニコ会とフランシスコ会とが、この問題に関しては鋭く対立するという甚だ纏れた関係が生じることとなる。その火種とは、異教のアリストテレスの哲学の流入に対する評価と解釈をめぐる熾烈な論争にほかならない。

前者、すなわち教区司祭教授団の攻撃に対するトマスの対応は、『靈的生活の完全性について』と『修道生活を妨げる者たちに対する論駁』という直接の論稿のほか、同時期の『神学大全』第二―二部の議論や『任意討論集』に散見される。そしてそれはキリスト教的生生活、なかならず「身分」としての修道生活の本質についてのトマスの知見を窺うのに格好の材料を提供している。だが、当面の課題からいえば、私たちの関心は後者、すなわちアリストテレス哲学に対する托鉢修道会側の態度の差異という問題のほうにつよく向けられざるをえない。というのも、繰り返しになるが、この位相において、アリストテレス受容に柔軟な態度を示すドミニコ会所属の神学教授トマスは、托鉢修道会の権利擁護のための闘いという点においては共闘相手であったフランシスコ会の教授たちと和解しえない関係に立たざるをえなかったからだ。このアリストテレス問題に対しては、フランシスコ会の教授たちははたくなままでに保守的で、異教の哲学者に対する根本的な猜疑と不審の念を隠そうとはしなかった。そしてそこには、同じパリ大学内の他学部、すなわち人文学部に拠点を置く、いわゆるラテン・アヴェロエス派——教授ブラバンのシゲルスやダキアのボエティウスらを中心とする過激なアリストテレス主義者たち——の存在が重大に絡んでいたことはいまでもない。

二度目のパリ大学神学部教授職に就任したトマスの、アリストテレスに対する基本的態度は師アルベルトゥス・

マグヌスと同様に、偏見から解放された自由なものだった。というよりは彼は師以上に、この異教徒の哲学のなかにキリスト教思想にとつて極めて「有用な」教えが含まれていることを積極的に認め、両者の調和を図ろうとしていた点において、大いに革新派だったといえる。そしてこのアリストテレス哲学の有用性を認識していたという場合、コプルストンの言葉を借りれば、それは彼が「アリストテレスの原理を真なるものと見なし、真なるがゆえに、有用だと見なしたのであって、これらの原理が有用であるがゆえに『真』であると考えたのではない。」<sup>(38)</sup> 言い換えれば、彼はその場のご都合主義からキリスト教の原理に逆らつて、無原則、無批判にこの新しく流入してきた異教の哲学を受容しようなどと試みたわけではなかった。

だが、フランシスコ会の保守的な神学者たちはアリストテレスに対するトマスの前向きな態度をきわめて危険なものとして受けとめた。パリ大学内には、人文学部にイスラムの哲学者アヴェロエスのアリストテレス解釈を全面的に受け入れて、その拡大を図ろうとするラテン・アヴェロエス派が力を得て久しい状況が続いていた。もとより教会当局はこの状況を手を拱いて傍観していたわけではない。彼らの信奉する教説——たとえば、(一)世界の永遠性(二)人間知性の単一性(三)二重真理説など——は明らかに異端として断罪されねばならなかった。数度のアリストテレス禁令にもかかわらず、依然としてやむことのないアリストテレス熱に危機感を募らせた教会当局は一二七〇年、パリ司教エティエンヌ・タンピエによるアヴェロエス派の断罪——十三項目の命題が挙げられた——をおこなつた。<sup>(39)</sup> この一二七〇年の断罪はトマスの神学部教授就任二年目の出来事で、直接自分のアリストテレス解釈へのそれではないとしても、内心はけつして穏やかではなかったにちがいない。

おそらくこの断罪の前に書かれたと思われるが、トマスは急進的なアヴェロエス派に対して自らの立場を弁証するためにも『知性の単一性——アヴェロエス派に対する駁論』を著している。そこには、知性がすべての人間にお

いてただ一つであると主張することによって、個々の人間の自由意志を否定し、ひいては人間の倫理的・道徳的生の可能性そのものを破壊するアヴェロエス派の誤謬が痛烈に批判されている。だがそれでも、伝統的なキリスト教の教えを墨守し、アウグスティヌス主義にあくまでも固執する守旧的なフランシスコ会の神学者たちは、トマスに対する警戒感を解くことはなかった。わけても若き神学部教授ジョン・ペッカムは最も先鋭的なトマス批判者で、その背後にフランシスコ会総長となっていたボナヴェントゥラの存在があったことはいうまでもない。ペッカムは世界の永遠性や事物における実体的形相の単一性などの問題に関して、トマスに異端の疑いが濃厚であることを公の場で攻撃するのを憚らなかった。『世界の永遠性について——つぶやく者たちに対する駁論』はそれへのトマスの応答である。

以上が十三世紀後半の歴史状況での、トマスをめぐるパリ大学内の対立の全体的構図である。この構図のなかで確認すべきは、彼のキリスト教的アリストテレス主義が一方における急進的なアヴェロエス主義と、他方におけるフランシスコ会の保守的なアウグスティヌス主義との中間にあって、かつして支配的な地位を確立しえてはならず、いまだ少数派の立場にとどまっていたということだ。トマス主義（トミズム）を十三世紀中世におけるカトリック教会の唯一の正統的体系のごとくみなすのはまったくの歴史的誤認である（<sup>40</sup>）（彼が列聖され、教会の公的な体系とされるには次の世紀を待たねばならなかった）。トマスの立場が当時多数派からどんなに危険視されていたか、は一二七〇年の断罪の七年後（一二七七年）に出された、同じエティエンヌ・タンピエによる二一九の命題の異端宣言のなかにトマスの命題も含まれていたことによってもわかるというものだ。<sup>41</sup>さらに、トマス含みという点では、同じ年に同じドミニコ会員でカンタベリの大司教だったロバート・キルワードによる禁令、一二八四年と一二八六年に相次いで出されたジョン・ベッカム（このときカンタベリの大司教）による禁令においても暗黙裡の対象となっ

ているのを知っておくのも無駄ではあるまい。

いずれにせよ、こうして、トマスはその存命中、結局少数派の立場にとどまることとなる。一二七二年、パリ大  
 学神学部教授の三年の任期を終えてナポリに帰り、同地に創設されたドミニコ会の大学で教授活動に携わり、『神  
 学大全』第三部に着手し、あわせてアリストテレスの諸著作の註解をおこなうが、一二七四年にナポリからリヨン  
 の公会議に向かう途上、病をえて没する。五〇歳に満たない生涯だった。このとき、パリ大学からの悔み状は学長  
 のアルベリクと、多数の人文文学部の教授からのみで、神学部からは一通も出されなかったといわれる<sup>(42)</sup>。それどころ  
 か、例のタンピエの断罪が発せられたのはその三年後の一二七七年である点に注意を喚起されたい。「革命家とし  
 て、招かれざる客としてトマスは一二七〇年とそれ以後この大学によって裁かれるようになる。」というF・ヘー  
 アの上述の言葉はこれらの関係を指していることはすでに了解されたであろう。

さて、トマスの実に膨大としかいいようのない著作群のなかでも最も重要な神学上・哲学上の書物が執筆（そ  
 多くは口述筆記だが）されたのが、いままでみてきたような知的状況のただ中からだったのを知ると、たとえA  
 ・P・ダントレーヴの次のような古典的な発言に対しては一定の留保をつけたくなるが、どうだろうか。

「伝記的な詳細は聖トマス・アクィナスの政治思想の紹介にあたってはほとんど、あるいはなんらの意味もも  
 てはいない。彼の学者らしい、波乱の少ない生涯は修道院や教室の相対的な隠遁生活のなかで費やされたものであ  
 る」<sup>(43)</sup>

少なくとも、はっきりとさせておかねばならないのは、トマスの壮大な学問的体系のうち、私たちの課題である  
 その社会・政治思想を知ることのできる主要な文献は、いずれも彼がパリ大学神学部と関係をもった時期（一二五  
 二年から一二七二年）のなかの、とりわけ後半部、すなわち第一回神学部教授時代が終わった時期から第二回神学

部教授時代にかけてだった、という事実である（上述されなかった著作で不可欠なものとして、『君主政治論』、アリストテレスの『政治学』および『倫理学』の註解が挙げられる）。そこに社会から隔絶した、安穩で、安樂で、緊張感のない、弛緩した気分などというものはほとんど窺われない。トマスがその壮大な思想の構築を図るべく格闘していたとき、彼の心の内側には意識から消しえない特定の個人や特定の集団がやはりいたのだ。このことは彼の社会・政治思想理解のうえで、疎かにしてはならない認識であろう

## 結

このように見えてくると、トマスを、たとえば中世封建制の相対的安定期のなかで生き、かつそれをもっとも見事に体現した神学者・哲学者としてすましてしまうような通俗的解釈はなんとでも廃されねばならないことがわかるだろう。

心しなければならぬのは、結果の出ているのちの位置に立ち、そこでの視点からトマスを見、いささかのためらいもなく（ヘトミズムの勝利者）という規定の簡便な枠組みのなかに彼を収めてよしとする安易な態度に流されてはいけないということだ。トマスが実際に生き、呼吸をし、そして倦むことなく思索を続けていたのは、間違いない不穩な、落ち着きのない、股賑を極めた世界だった。

この確かな事実を真に確認することなしには、トマス思想が時代の知的状況に提示してみせた体系的も総合性もけっして掴まえることはできない。

そのことをふかく心に銘記しつつ、彼の思想理解の旅に出立することにする。<sup>(44)</sup>

注

- (1) エティエンヌ・シルソン、フィロテウス・ヘーナー『アウグスティヌスとトマス・アキナス』服部英次郎・藤本雄三訳、みすず書房、一九八一年、二〇一頁。
- (2) トマスの生涯に関して、数ある文献のうち本稿では J. A. Weisheipl, *Friar Thomas D' Aquino*, Basil Blackwell, Oxford, 1974. W. A. Wallace; J. A. Weisheipl, "St. Thomas Aquinas", *New Catholic Encyclopedia*, XIV, 1967, pp. 102-115. A. Walz, *Saint Thomas D'Aquin*, 1962. および邦語文献では、稲垣良典『人類の知的遺産 20 トマス・アキナス』講談社、一九七九年。同『トマス・アキナス』清水書院、一九九二年を主に参照した。最も新しいところでは、Thomas O'Meara, *Thomas Aquinas Theologian*, University of Notre Dame Press, 1997.
- (3) トマスの家族構成に「*ごつげんぼ*」 J. A. Weisheipl, "Appendix 1", in *Friar Thomas D'Aquin*, pp. 159-161.
- (4) J. A. Weisheipl, *op. cit.*, pp. 10-11.
- (5) Bernard Guidonis, 3, in K. Foster, ed., *The Life of Saint Thomas Aquinas: bibliographical documents*, Longmans London, 1959, p. 26.
- (6) *ibid.*, p. 26.
- (7) グラーブマン『聖トマス・アキナス その人と思想』高桑純夫訳、長崎出版、一九三四年、三頁。
- (8) この「書簡」に関しては、拙稿『書物に殉じた鈍牛』——トマス・アキナスの思想世界——(『獨協法学』第五十号、一九九九年十二月)を参照されたい。
- (9) J. A. Weisheipl, *op. cit.*, p. 13ff. A. Walz, *op. cit.*, p. 33ff. 稲垣良典(一九七八年)、七八―七九頁。なお、この「*universitas* (教師と学生のギルド)」と *studium generale* (学苑・学舎)とを区別しているのは、とくに前者が教授資格(学位)授与の機関であるのに対して、後者は人文科学、神学、法学の全般が教授され、特定の司教区・管区に限定されていないことを指す (J. A. Weisheipl, *op. cit.*, pp. 157-158)。中世の大学成立の問題はこの両者の「区別」と「結合」のそれであるとすることはラッシュモールド以来の共通認識であろう。H. ラッシュモールド『大学の起源』(上)横尾壮英訳、東洋館出版社、一九六六年、三九頁以下。また、ナポリ大学成立に関しても、同書(中)、一九六七年、二六―三〇頁を参照。
- (10) ハスキンス『十二世紀ルネサンス』野口洋二訳、創文社、一九八五年、二五二頁。

- (11) *Saint Thomas D'Aquin sa vie par Guillaume de Tocco, et Les Temoins au Procès de canonisation*, 1925, p. 37.
- (12) *ibid.*, p. 37-38.
- (13) *ibid.*, pp. 264-265.
- (14) *Bernard Guidonis, op. cit.*, 7, p. 30.
- (15) ガイのベルナルドゥスはこのあと、眠りに落ちたトマスに、「二人の天使が訪れて、神が彼の祈りをお聞きになっておられると告げた」と述べている。そして「神の名のもとに汝をけっして緩むことのない貞潔の帯で締め付けよう」と天使たちはいったという。トマスは天使たちの聖なる締め付けで、目が覚め、苦痛のあまり叫び声をあげたというが、その後、トマスはこの話を僚友レギナルドゥス（ピベルノ）を除いては秘密にしていた。そしてこれ以来、女性を避けるのが彼の習慣になったが、それはちょうど人が「蛇を避けるのと同じよう」だとベルナルドゥスは語っている（*op. cit.*, 7, p. 30）。この話はもちろんトッコも紹介済みである（*ibid.*, p. 265）が、いずれにせよ、このトマスの「天使的」純潔、完全な貞潔の徳（*castitas*）を讃えて、「天使的博士」（*Doctor Angelicus*）——「（教会）共同博士」（*Doctor Communis*）に遅れて——なる称号がつけられたのであろう。ヴァルツによれば、それは十五世紀の終わりのことだとおられる（*A. Walt, op. cit.*, p. 213）。なお、この点については、トマスの天使論とも関連して稲垣良典氏の興味深いエッセイがある。「トマスと天使」（『上田辰之助著作集』第二巻付録、第二号、一九八七年十二月）。
- (16) J・B・モラル『中世の政治思想』柴田平三郎訳、未来社、一九七五年、七七頁。
- (17) J・R・Strayer, *Western Europe in the Middle Ages*, 1955, p. 143ff.
- (18) P・ネメシエギ「トマス神学 of 的思想的位置」（松本正夫・門脇佳吉・K・リーゼンフーバー編『トマス・アキノナス研究——没後七百年記念論文集』創文社、一九七五年）一九—二三頁。
- (19) A・ケニー『トマス・アキノナス』高柳俊一・藤野正克訳、教文館、一九九六年、七一—八頁。
- (20) ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』（『世界の名著』ブルクハルト）柴田治三郎訳、中央公論社、一九六六年）六四—六六頁。
- (21) フリードリッヒ二世の「エッセイ」E. Kantrowicz, *Friedrich the Second*, 1931. G. Wolf, ed., *Stupor Mundi*, 1966; D. Abulafia, *Friedrich the Second*, 1988. 2) の叙述は、モリス・キーン『ヨーロッパ中世史』橋本八男訳、芸文出版。

- 一九七八年、一三一—一四五頁に負うところが多い。
- (22) ブルクハルト、前掲書、六四頁以下。
- (23) いまでは古典的な文献として、堀込庸三『西洋中世世界の崩壊』岩波書店、一九五八年だけを挙げるにとどめる。
- (24) フリードリッヒ・ヘーア『ヨーロッパ精神史』小山宙丸・小西邦雄訳、二玄社、一九八二年。
- (25) 同、「日本語版へのまえがき」
- (26) 同、一〇六頁。
- (27) 同、一〇七—八頁。
- (28) 同、一〇九頁。
- (29) 以下の叙述全体にわたっても、基本的には主としてJ. A. Weisheipl (op. cit., p. 93ff); A. Walz (op. cit., p. 75); 稲垣良典 (一九七九年) 一〇一頁以下・(一九九二年) 七八頁以下に拠っている。
- (30) 大学の成立史に関しては主な文献は邦訳がある。以下で十分だろう。H. ラッシュドール『大学の起源』(上)・(中)・(下)、横尾壮英訳、東洋館出版社、一九六六—六八年・ハスキンズ『大学の起源』青木靖三・三浦常司訳、法律文化社、一九七〇年；ジャック・ヴェルジェ『中世の大学』大高順雄訳、みすず書房、一九七九年・ハンス・ヴェルナー・ブラール『大学制度の社会史』山本充訳、法政大学出版社、一九八八年。
- (31) ジャック・ヴェルジェ、九三—九四頁。なお、引用文中の「大法官」なる訳語は「司教座聖堂参事会付き」文書局長(尚書長)、ないしは原語(本書はフランス語なので)をいかしジャンスリエが適当であろう。当時、「教授免許」を授与する権利はパリでは司教座聖堂参事会員の *chancelier* —〈ラ〉*cancellarius*—が握っていた。この訳語を「大法官」とするのは、たとえば「大法官 (*chancellor*) トマス・モア」の連想のような気がする。
- (32) 周知のように、特権をもった自治団体 (*universitas*) ≡ 「教師と学生の組合」としての大学の成立過程とは、教会権力と世俗権力(国家および自治都市)とに対する自治権獲得ための闘争の過程である。まず教師は当時、自身が聖職者であるため、大学所在地の司教の監督権に服さねばならなかった(たとえば、教区の司教は教授免許を授与する権利を文書局長「尚書長」に委ねるかたちで管理していた)。一方、自国内に官公吏を得るための養成機関とさせるべく王権もまた大学構成員に対してさまざまな圧力をかけていた。そこでかれら(教師・学生)は修学身分のゆえをもって自分たちを聖職者として

認めさせようとした。聖職者特権（たとえば、学生が国王やその代理役人、あるいは市民に対して刑事上・民事上の係争に関与する場合に、世俗の法と法廷ではなく、司教法廷で教会法による審理をうける権利など）の享受を求める闘争である。そして、大学はしばしば講義停止や授業放棄、ストライキを通じてこれらの特権を獲得していったのである。ここで「一二二九—三一年の大規模な四散（大離散）」というのはパリ大学史上、最大のそうした闘争を指す。この大事件の経過については、ラッシュドールの書に詳しいが、参考までにその一節を引用してみよう。いわゆる「市民（町）」と学生（大学）との騒乱」はすでに一二〇〇年にはじまるが、この時期の騒乱をラッシュドールは次のように書いている。

「一二二八—九九年、謝肉祭の期間に何人かの学生が、サン・マルセルという郊外の一画に遊び、居酒屋に入って、『たまたまそこに、上等のうまい酒を見いだした』。ところが、その勘定で、亭主とのいざこざが起こった。口げんかは忽ち、耳を引張り髪の毛をむしる暴行と化した。やっつけられた亭主は隣人に助けを求め、学生たちは、こっぴどく叩かれて退散を余儀なくされた。次の日、かれらは、刀や棒切れで身を固めた仲間の強力な増援をえて引き返し、居酒屋に踏み込んで、亭主と隣人に仲間の仇討ちをし、樽の栓を抜きっぱなしにして、『ごう慢と酒に酔いしれたまま』街頭に練り出し、男女をとわず平和な市民のぎせいにおいて楽しみをほしにまにした。しかしその止まることを知らぬ戯れは、遂に、市総監とその下役——野蛮な都市の野蛮な警察——の登場を招き、形勢を再び『町』に有利にした。すでにサン・マルセルの小修道院長が、教皇使節と司教に訴えており、彼らは、摂政ブランシュ・ド・カステューに騒じょうの即時鎮圧を促した。女王は、『女性的直情により』（パリス Matthew Paris の言う）、性急にも、暴動の張本人の処罰を市総監とその傭兵（Turpains）に下命した。兵隊たちはしかし、犯人というより（史家パリスの言を信ずれば）、城壁の外で休日の遊びを楽しんでいた無実無根の学生群を襲撃し、学生の一部が、つづく乱闘で殺されたため、教師たちは、王権の明らかに公認した彼ら唯一の対抗手段を利用して、講義を停止した。しかし、司教、教皇使節に対する彼らの訴えは、ともにむだであった。パリの司教と教会の大学団に対する反感の強さは、ぶつう些細なものでも、『僧侶』に対する侮辱が、全面的な破門、聖務停止の十分な理由と考えられたその時代に、残忍な兵隊による学生多数の殺害が、彼らの上役にはかえって、成り上がりの大学団をやっつける一策、と歓迎された事実からも推察できよう。宮廷もまた、教会のつよい影響の下にあり、とくに大学団の仇敵パリの参事会員にくみしていた。その上、この時ばかりは、教皇使節も同じ側に立っていた——それは彼が、大学団の印璽に関してとった処置から、学生に襲われた僅か四年後のことだった——のである。／『講義停止』（cessatio）がむだだとわ

- かると、教師たちは、次の復活祭の翌日、より強硬な手段に訴えた。もし一月以内に、公正な措置がとられねば、六年の間大学団を解散する。また、その間に十分な補償が与えられなければならないとえ六年がすんでもパリに帰還しない、と彼らは決議し、その言葉通りに実行したのである。教師・学生の大半が、パリを後にした。」(ランシュドール、前掲書(上)、二七三―四頁)。この事件は最後は教皇グレゴリウス九世の教書『諸学の母』によって、大学のストライキ権の承認をもって一応、終結した。
- (33) 田中峰雄『知の運動——十二世紀ルネサンスから大学へ』ミネルヴァ書房、一九九五年、九二頁。この書の第二部「十三世紀のパリ大学と対修道者闘争」の第三章「形成期のパリ大学と托鉢修道会」および第四章「対修道者闘争とフランスコ会」はこの問題に関する近年のわが国での最も包括的、体系的な研究成果であろう。また同じく邦語文献として、大島誠「7 知識と社会——大学の成立と教皇の介入を中心として——」(江川温・服部良久編著『西欧中世史』「中」ミネルヴァ書房、一九九五年をここでは容易に入手しうるものとして挙げるにとどめる。
- (34) この時期のパリ大学における托鉢修道会士と大学側との抗争の詳しい経緯に関しては、ランシュドール、前掲書(上)、二七九―三一五頁がいまなお有用である。
- (35) A・ケニー、前掲書、一三頁。
- (36) 一二五九年から一二六八年のイタリア時代については、J. A. Welsheipl, *op. cit.*, pp. 141-239; A. Walz, *op. cit.*, pp. 115-148; 稲垣良典(一九七九年)一四一―一六六頁; 同(一九九二年)一〇八―一四一頁。
- (37) 同じく一二六九―一二七二年にかけての第二回パリ大学神学部教授時代については、J. A. Welsheipl, *op. cit.*, pp. 241-292; A. Walz, *op. cit.*, pp. 149-172; 稲垣良典(一九七九年)一六七―一九二頁; 同(一九九二年)一四四―一七〇頁。
- (38) コプルストン『中世哲学史』箕輪秀二・柏木英彦訳、創文社、一九七〇年、四五九頁。
- (39) この十三の命題に関する断罪には、邦訳がある。のちの一二七七年の禁令とともに、『中世思想原典集成 13 盛期スコラ哲学』平凡社、一九九三年のなかに「一二七〇年の非難宣告／一二七七年の禁令……パリ司教エティエンヌ・タンピエ」(八木雄二・矢玉俊彦訳)として収められている。
- (40) トマスが列聖されるのは、世紀があけて一三三三年六月十八日、アヴィニョンで教皇ヨハネス二十二世によってである。

- 死後、約半世紀が経過している。したがって、生前中、彼がいかに危険視されていたかは、おのずとわかるであろう。この点に関して詳しくは別稿で扱うつもりなので、ここでは次のようなコプルストンの言葉引用するだけにしたい。「トマスがアリストテレスを採用したことによって生じた敵対感情に目を向けよう。この敵対感情はアヴェロエス主義、すなわちアヴェロエスのアリストテレス解釈によって惹き起こされた騒動を念頭において見なければならぬ。アヴェロエス主義者は——たしかに正しくないわけではないが——聖アウグスティヌスや一般に聖人の權威よりも異教哲学者の權威を重んずるといふ点で、また啓示の十全性を損なうという点で非難された。そして聖トマスはある熱烈な伝統主義者達によって味方を裏切る者と見なされた。したがって彼らはアヴェロエス主義に向けられた非難にトマス主義を含めようと全力を尽くした。挿話のすべては、聖トマスがその時代の改革者であったこと、彼が新しい道を見出したことをわれわれに想起させる。トマス哲学が伝統と神学上の妥当性や確実性を意味する場合に、このことに留意した方がよい。性急な人々から聖トマスがひどく攻撃された点は、今日のわれわれにとっては特に驚くべきこととは思えないが、攻撃された理由は主として神学的な性格のものである。したがってトマスのアリストテレス主義はかつて『危険な』ものと見なされ、われわれの前に明らかである。攻撃は彼自身の修道会の外に限られず、彼はドミニコ会士の敵意にすら耐えねばならなかった。」
- (40) (コプルストン、四六六—七頁)。
- (41) 一二七七年の禁令については、注(16)を参照。
- (42) フリードリッヒ・ヘーア、一〇九頁。
- (43) A. P. D'Entreves, "Introduction", in *Aquinas Selected Political Writings*, Basil Blackwell, 1959, p. vii.
- (44) なお、本稿で挙げられたトマスの著作のテキストに関しては、以後の一連の論稿のなかで明示することにして、ここではそれらを一々記すことはしない。